



祖父の思い出

会員 中川 裕子 (70期)

私の祖父は、ちょっと自慢の祖父だった。遊びに行くといつも机に向かっている勉強家で、病気で亡くなる直前まで、精力的に自身のライフワークである短歌に打ち込んだ。言葉数は多くないが、時折見せる祖母への鋭い突っ込みがいつも面白い人だった。

「億劫の時を過ぎしほほゑみか ガレ場にはほふ駒草の花」

祖父はいつだったか孫それぞれに対して短歌を一首ずつ贈ってくれた。祖父が私にくれたのは、司法試験の受験勉強を続ける私への応援歌だったので。祖父は簡単に解説をしてくれたけど、細かいところは各人の解釈に任せる、といった様子だった。

「億劫」は、通常の読みは「おっくう」だが、ここでの読みは「おくこう」だ。「劫」は仏教の世界における時間の単位で、100年に一度舞い降りた天女が羽衣で山の頂を撫で、その摩擦で山がやがてなくなるまでの時間を指す。一劫でもとてつもない時間を指すのだが、それが「億」なのだから、とにかく果てしない時間を意味するのが「億劫」ということになる。駒草は高山植物で、細長くかわいいピンク色の花をつける。見た目はとても可憐だが、意外と寒さや強風、乾燥に強く、他の高山植物も生えることができないような砂礫地（ガレ場）や斜面を好んで生えるのだという。

「弁護士になりたい！」と言って、大学卒業後の進路をロースクール進学に定めて法律の道に飛び込んだものの、なかなか合格できず「億劫」にも感じられるほどの長く希望のない受験生活に四苦八苦している私を見て、それでもいつか合格できたときの

姿を、ガレ場にたくましく堂々と咲く駒草の花に重ね合わせてくれた（のだと勝手に私は信じている）祖父の思いを辿るととても嬉しかった。登山も趣味としていた祖父らしい歌だった。

今回の執筆に際し、あらためて駒草について調べてみると、強酸性の砂礫地に先んじて生え、土地を中性化させて安定させる作用があり、表土が中性化すると他の高山植物が進出してくる代わりに駒草自身は消滅していくそうだ。このため、駒草は「先駆植物」とされているらしい。祖父がどこまで駒草のことを知って、どこまで意図してくれていたのか、今となっては確かめようがないけれど、勉強家の祖父ならばきっと「駒草のようなたくましさ」と「パイオニア精神を持って」と、そんな期待も込めてくれていたのではないかと思わずにはいられない。

真面目で、勤勉で、実直で、そしていくつになってもチャレンジを忘れなかった祖父の姿には到底及ばないが、祖父は私の人生の大きな目標であり、祖父のような人間になりたいとあこがれている。

祖父は短歌を贈ってくれた約1年後に亡くなり、残念ながら私の司法試験合格は間に合わなかったので、私が今こうしてひまわりのバッジをつけて仕事をしている姿を見せることはかなわなかった。

祖父の短歌を読んでもみると、どれも少し皮肉がきいていて、くすりとするものが多く、生前の祖父には日常がこんな風に見えていたのかと興味深い。私が成長するにつれて、祖父と会う機会も交わす言葉も減ってしまっていたけれど、今になって祖父に聞きたいこと、おしえてもらいたいことがたくさんあふれている。